

---

# ファンタシースターポータブル2i ~ 異世界の5人 ~

サイクロン&ハリケーン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2 in 異世界の5人

### 【Nコード】

N4736Z

### 【作者名】

サイクロン&amp;ハリケーン

### 【あらすじ】

それは遠い星のお話。軍事会社リトルウィングにルーク・フィレンという青年がいた。彼は亜空間事件を解決した英雄である。

そして欠片事件から半年後があったある日、何やら怪しい5人がある会話をしている。彼等は何者なのか、まだ知るのには先の事であった。

ルークは自分の本名である、ディオ・ルタ・オルテガとして、生きることに決めた。自分の事情でリトルウィングに戻ったディオ。

それがグラーレル関わる第一歩であった。

## プロローグ：謎の5人（前書き）

初投稿です。自信がないですが、どうぞ御覧ください（ちなみに主人公はまだ出ません）。

## プロローグ：謎の5人

? 「ここは、どこだ？」

? 2 「どうやら成功したみたいだね。」

? 3 「ああ、そのようだな。」

? 「失敗するかと思っただが……、何もなくて良かった。」

? 4 「失敗するわけないツスよ。俺が造ったんツスよ」

? 5 「その様なしゃべり方だから、そう言われるんだ。」

? 2 「でも、彼の腕はたしかだよ？」

? 4 「良いこと言ってくれるじゃないツスカ。」

? 「そんなことより、本当に大丈夫なのか？」

? 5 「ああ、大丈夫だ。準備はできてる。俺達の目的を達成させよう。」

? 「ふっふっふ、そうか。」

? 3 「時間もなし、もう行くつぜ。」

?2「そつだね。」

?5「さてよ、先々行くのは良くない、そつだなまずは……。」

## プロローグ：謎の5人（後書き）

うーん、とりあえずここまでですね。誤字、脱字がありましたら、教えてください。

## 第一話：依頼 1（前書き）

続けて投稿です。前は会話だけだった。でも後悔はしてないようなあるような。

まあ前は気にせず御覧ください。



## 第一話：依頼 1

「マイルーム」

この部屋に1人の青年がいた。彼の名はルーク・フィレン、亜空間事件を解決した英雄である。だが、今は彼はベッドで寝ている。病気出もなく怪我したわけではない。彼に取って久しぶりの休日になる……はずだった。

コンコン

「はい。」

「ルーク？いる？」

「（うるさいのが来たな）ああ」

扉が開き姿を見せたのはエミリアだった。

「何よ、その返事は？」

「別に（言ったら殺される）で、何のようだ？」

「うーん、実はさ。あなたにお願いしたい事があるの」

「なんだ？」

「実はナギサに声をかけたんだけど、依頼が入っていけなくなった

んだ。」

「んで？」

「だから、あんたに来てもらいたいんだ」

「どこに？」

「依頼」

「依頼？……悪いが、今日は俺は休……」

「お父さんに声を掛けたら、ルークと行けと言われた」

「おいおい……」

「ルーク……お願い」

少し考えて、ため息を付き

「わかったよ。付いて行けばいいんだろ？」

と答えエミリアが笑顔で

「ありがとう」と答えた。

「やれやれ」と言いながらベッドから出でる。

「依頼内容は？」とエミリアに聞く。

「うーん、何かパルムで不審な5人を見たんだって。」

「その5人を何者が調べると。」

「そう、その通り」

「さっさと終わらせよう。せつかくの休日なのに仕事するなんて」

「ぶつぶつ言わないの。はやくい」

「やれやれ」 咳きながら、部屋を出た。

第一話：依頼 1（後書き）

やっぱり小説は難しいですね。でも頑張ります。  
……うん、頑張る

第一話：依頼2（前書き）

少し編集しました。

ルーク「編集して、余計変になっただんじやないのか？」

そ、そんなことないさ・・・。

## 第一話：依頼2

〳〳パルム草原〳〳

依頼を受けたエミリアと無理やり依頼を受けさせられたルークがいた。

「エミリア？ここに依頼にあつた不審な5人を見た場所か？」

「うん。そうだけど、誰もいないね？」

「だが、油断はするなよ。いきなり襲つて来るときもあるからな。」

つとエミリアに注意を促した。

「わかった」つと返事をするエミリア。

「とりあえず、辺りに誰かいないか、搜索するか。」

「そうだね、まずは人を探さな・・・。」

「！！？エミリア！！伏せる！！」と叫ぶルーク。

「え？」

「ちっ」とエミリアを無理やり右に押す。

「痛っ」と地面に尻餅をついたエミリアが声を出す。

「くそ、どこからだ」辺りを見渡すルーク。っとそこに。

「あゝあ、外しちゃった。結構自信あったんだけどなあゝゝ。」  
と声がした。

「誰だ!!」っと声がした方向に声を出した。

「普通、自分から名乗るものでしょう? 礼儀をしないの?」

「なに?」

「いたたたっ」お尻を擦りながら立ち上がるエミリア。

「大丈夫か。エミリア?」

「人を押し倒しといて、その台詞言うかな? まあ大丈夫だけど。」

「わりい、その方法しかなかったから。」

「いやいや、その他にも方法があるでしょう!？」

などの会話をしていると、

「何? 漫才でもやってるの? あんまり面白くないよゝゝ」

「姿を見せないお前に言われたくない。っていうか漫才なんてして  
いない」と声がする方向に喋る。がしかし、

「どこ見て喋ってるの、後ろだよゝゝ。君の後ろ」

「「!!!???」「と振り向く2人。

「いつからそこに?」っと、ルークが質問をする。

「『お前に言われたくない』って辺りかなあ〜?」

「うっう、何かしゃべり方が腹が立つ。「っとエミリアが言う。

「あははは、いい慣れてるから、痛くも痒くもないよ〜。どう?  
?余計に腹が立ったでしょう?」

「それより、どうやって後ろに?」ルークが質問をする。

「あまり腹が立たなかったみたいだね〜、まあ、いいや。それより  
答えないとね〜、君の質問に〜。簡単だよ〜。僕ちんの特殊能力だ  
よ〜。」

「特殊能力?」

「特殊能力って言っても、ピンと来ないと思うよ〜。まあ、さらに  
簡単に言うかね〜、……僕は普通の人間じゃあないんだよ。「  
言い方が少し悲しそうに話す。

「えっ?」

「でも……、……どうでもいいことだよねえ〜。おっと忘れるとこ  
ろだったよ〜。「っと、何かを思い出したかのよつに、背筋を伸ば  
して喋る……が。



「実はさ〜、君達にお願いがあるんだ〜」全く礼儀のない言い方でルークに言う。

「誰がお前のお願いを聞くもんか。」っと、そう答えるルークに。

「ほんと。襲撃しといてなによ、それ？しかも、礼儀がまったくないし〜」

エミリアもそう答える。

「困っている人を助ける仕事なんでしょう？助けてよ〜。子供だよ？僕ちゃん」

「子供も大人も関係ない。襲撃した理由を聞き出してやる。っついていか自分からいうか？『子供だよ？』って「っと言いながら、シッブウジンライを構える。」

「子供だから、子供って言ったただだよ〜。それよりなに〜？子供に武器使うの〜？大人げないなよ〜？ま、武器を使っても君は勝てないけどね〜」

っと言いながらゼロセイバーを構える。

「エミリア！！下がってる！！」

「ルーク、あたしも戦うよ」

「パートナーの言う事聞くもんだよね。って君が戦っても足手まといになると思うよ。」

つと笑いながら言う。

「うっさい、あんたに聞いて……」

「エミリア。下がってる……大丈夫、そう簡単にやられないさ。」

「つと真剣な顔でエミリアに言う。エミリアも観念したのか、

「わかった。」つと、答えた。

「さてと、準備はいいか？」つと子供に言う。

「僕ちゃんは、いつでもいいよ」。あ、そうそう、僕ちゃんの名前はミケ。ミケ・ラン・ジャータン」

そしてミケはルークに飛び掛かる。

第一話：依頼2（後書き）

とりあえず、ここまで。

ルーク「やっぱり、内容が」

誤字、脱字がありましたら教えてください。

ルーク「無視するなよ」

## 第一話・依頼3（前書き）

初戦闘シーンです。

ルーク「俺の出番が多くなるわけだ（内容は心配だけど）」

では、どうぞ

### 第一話：依頼3

「ふっ、遅いな」っといきなり飛び掛かるミケに対し、右側に避け、ミケに攻撃の体勢をしようとした時、

「君がねっ」っと言った瞬間、地面に左手を付き、左手をグイッと地面を押し飛び上がり、ゼロセイバーをしまい、インフィニットブラスターを構え、ルークに射つ。

「!!!!!!」

攻撃の体勢に入っていたせいか、顔を左に避ける事しか出来ず、2つの弾の内、一発頬にすれた。そして、そのすれた所から血が出てきた。

「ルーク!!」っと呼んだエミリアが戦いに加わろうとしたが、

「下がってろっっていただろ!!」っつとルークが叫ぶ。

「あんな奴、一人で戦おうなんて、言う方がおかしいよ!!」

「あははは、仲間割れしてる〜」っつと地面に着地していたミケが、いつの間にかインフィニットブラスターをしまい、ゼロセイバーを回しながら、嘲笑う。

「ちっ、調子に乗りやがって」

「ルーク!!」

「……。分かったよ、だが、無理だけするな」

「あんたも、無理はしないでよ」

「ああ、分かった」

「あちゃ〜、2対1になっちゃった〜。でもね〜、僕ちゃんはね〜、2対1でも勝てるんだよね〜。」ゼロセイバーを回しながら言う。

「その自信、いつまで続くとおもうなよ」

「パートナーに『下がってる』っていった奴がそのセリフって……あははは、変なの〜。」

「お喋りは、ここまでだ」っとミケに睨み付け、シップウジンライをしまい、アカツキ・印を持ち、ミケに向ける。

「あたし達をあまりなめないで」クラールリタ・ヴィサス？を持つエミリア。

「別になめてないけどな〜、」っとまだ嘲笑ってるのか、ゼロセイバーを回してる。

「その言い方とその態度が腹が立つっての。」っとエミリアが言う。

「あつ、そうなんだ〜、だったらねえ〜」っとゼロセイバーを回すのをやめ、

目をつぶるミケ。そして……ゆっくり目を開け……

「……、普通に喋ればいいんだね」っと言い、ゼロセイバーをしまい、何やら構えをとり、そして……。

「じゃあ、戦うことも普通にいかせてもらっよ。もう手加減なしだよ！！本気でいくからね！！」っと言った瞬間体が光始めた。

「「！！！！」」

2人が驚く。

2人の前に姿を表したのは、暴走中のナノブラストの姿であった。

「ばっ、バカな」っど驚くルーク

「嘘でしょう！？何でヒューマンがナノブラストができるのよ！！」っど叫ぶエミリア。

(言い忘れましたが、ミケはヒューマンです)

「言ったはずだよ、僕は普通の人間じゃあないって、あと1つ言っとくけど、僕のナノブラストは時間制限はない。僕のナノブラストを止めることが出来るのは」

「お前を倒す事だ。」

「そのとおり。それと、自分の意思でも止めることも出来るんだ。さてと、お喋りは終わりだったね。じゃあ望み通り終わらせてあげよ。君達が死ぬことで。」っどルークに飛び掛かりあっという間

にルークの目の前に来ていた。

「!?(速い)!!」と思ったルークだが、

ドン!!

腹に蹴りを入れられ、吹っ飛ぶルーク。

「グッ!!」ルークが飛ばされる。

しかし、凄いスピードでルークに追いついたミケがルークを踏み台にするかのように、おもいきり腹を踏む。そしてルークが地面に叩きつかれる。

「ぐぐはぁッ!!」地面に叩きつかれたと同時に口から血を出す。

「ルーク!!」っと近寄るが、

「……終わりだ、ルーク……」っと言い残しルーク止めを指そうとしたが、。

……。

「言っただろ?お喋りは終わりだっつて。」っとニヤリと笑ったルーク。

「ばっ!!!!」っつとびっくりしたミケ。その訳は……ルークがアカツキ・印で攻撃を防いでいたのだ。





何かを察知したミケだが、気付くのが遅く何かにぶつかり、遠くに吹っ飛ぶミケ。それはエミリアが放ったミラージュブラスト、コンル（氷刃ノ疾風）だった。

遠くに飛ばされた先には、大きな木が一本立っており、その勢いのまま、ミケは木に叩き付けられた。

バツキイイイ〜ツ

つと木が折れた音がし、勢いが強かったせいか、そのまま木を通り越し、折れた木を少し離れた所で、地面に落ちた。

「ふう〜」。・・・（・・・終わつたかのか？）「つと警戒をルークは息を吐く。」

「ルーク!!大丈夫?」

「ああ、何とか。しかし、エミリア?なぜブラストがたまつてたんだ?」

「ああ、それ?実はバスクからもらつたのを食べたんだ。これだよ。」

「ん?そのクッキーみたいなやつ?」

「そうだよ、これ美味しいんだよ。」

「まあ戦闘中に食べるのはどうかしてるが、とにかく助かったよ。ありがとな、エミリア。」つとエミリアにお礼をするルーク。

「最初の言葉が気になるけど、まあいいか。」っと笑うエミリア。

「ふふっ」っとつられて笑うルーク。

「あっ、それよりルーク？あいつどうする？」っとルークに聞く。

「そのままにしとくのは、あれだしな。とりあえず連れて帰るか。」

「えっ？」っとエミリアが言った時、

「くっっ」

「！！！！」

「ま……まだ……まだだ……僕は……まだ……まだ……負  
け……てない……」かなりフラフラになりながら立つミケ。あまり  
力が無いのかナノプラストの状態ではない。

「……」

そのミケを見たルークとエミリアがそれぞれ違う反応した。

「やれやれ」っとルーク

「あれだけ、やられておいてまだ立つかな」っとエミリア

「さあ、いい」っと言うミケだったが、その時。

？「あつ、見つけたぞ、ミケ。」

？2「あの野郎、またやりやがったな。」

「！！！！」

その声に驚いたルークとエミリアは、声が出たほうを見た。そこには、2人が歩いてくる。1人はミケと同じヒューマンで18〜19歳ぐらいの背の高い青年。もう1人はデューマンで15〜16歳ぐらいのなかなか背の高い少年がやって来た。

第一話・依頼3（後書き）

誤字、脱

ルーク「ちょっと、いいか（怒）」

あれ？何で、怒っ

ルーク「ミラージュブラスト！！！」

ぎゃ~~~~~。

エミリア「誤字、脱字があったら教えてね」

そ……それ……俺の……セリフ……

第一話：依頼4（前書き）

何回も読み直したから多分大丈夫です。

っと言っておきながら、少し訂正しました。

ルーク「また、訂正するんじゃないか？」

そ、そんな事はない、……うん。

ルーク「はあ〜」

## 第一話：依頼4

18〜19歳ぐらいのヒューマンの青年が、ルークとエミリアに近づく。

？「すみません、僕の弟が迷惑をかけましたか？」

？2「兄貴、ミケのあの姿とこの2人の疲れ具合を見る限り、迷惑をかけたに決まってるだろ？」

15〜16歳ぐらいのデューマンの少年が言う。

「あ、あの〜、あなたたちは？」とエミリアが2人に訪ねる。

？「ああ、。申し訳ありません。紹介が遅れました。僕の名前は、ディオーン。ディオーン・バーデン」

？2「俺は、ソロ。ソロ・レスター」

つと青年と少年が自己紹介をする。

「俺の名前は……」

つとルークが自己紹介しようとしたが、

「君たちのことなら、よく知ってるよ。ルークさんとエミリアさんですよね？」

「「えっ?」「っと驚くルークとエミリア。」

「ど、どうして、あたし達の名前を?」

「何故って、お前達よく雑誌などに載ってじゃあねえかよ」

「雑誌に載ってるだけで、実際パツと見ただけで、分かるものか?」  
っと聞くルーク。

「……、分かったよ、正直に言っよ。」「っとディオオンが言っ。

「いいのか?兄貴?」

「言わないと、疑われるからね。だが、その前にミケのことで謝らないと」「っとディオオン。

「まったく、アイツのせいで、仕事もやりにくくなるだらけだ。」「  
っソロが右手を頭に当て、ため息をつく。

「ミケ、こっちにこい」「っとソロが叫ぶ。

「……。」「ムスツとするミケ。しかし、

「僕の頼みでも……かい?」「っとディオオンがいう。

「ッ!!!」（顔は笑っているが、なんだ、この威圧感は）「っとルークは感じた。



ミケはしぶしぶ頷き、ゆっくりディオンの近づく。

「瞬間移動みたいな特殊能力が使えるんだから、使えばいいじゃん」と言っただエミリアだったが、

「力が残ってないから、使えない」と苛立ちながら言う。

「ミケ!! さっさとこの2人に謝れ」とミケ言うソロ。

「……ごめん」とミケが心がこもってない謝り方をする。

すると、

ドカツ!!

ディオンのミケを叩きつけ、ミケの頭を押しながら、

「ちゃんと謝りな? ミケ。」とディオンの言う。

「痛い痛い、ディオン兄さん、痛いよ。」と痛がるミケ。

「謝りなさいって、言ってるんだよ。」とさらに押し付けるディオンの。

「うわ~~~~、痛そう。」とエミリアが言った。

「わ、分かった。ご、ごめんなさい!!」とミケがもう一度謝る。

「いいよ、よく出来たね。」つと言いながら、ディオオンが押し付けた手を離す。

「だいたい、人を襲撃しといて、謝るだけでいいのか？」つと疑問がるソク。

「そうだね、どうしたらいいかな？」つとディオオン。

「えっ……、僕、謝った意味くない？」つとミケ。

「……もう一度、謝るかい？」つと笑顔でミケに覗む。

「いやいや、もういいよ」

「はあ……、どうする？ルーク？」つとエミリアがルークに言う。

「まあ、俺たちも戦って、ミケに傷付けたしな。」つとルークが答える。

「そうだ、君たちも謝……、痛ッ！！」またディオオンに頭を叩きつけられる。

「もう一度、謝りなさい」つとディオオンがミケの頭をさっきより強く押しながら言う。

「じめんなさい……」

つとミケ。

「はあ〜、」また右手を頭に当て、ため息をつくソロ。

「1ついいか？」っとルークがディオンの質問をする。

「はい、何でしょうか？」っと威圧感のない笑顔で答えるディオン。

「お前たちは・・・」っと質問をしようとしたが、突然、

ピピピピピピ

っとエミリアの通信がなった。

「誰からだ？」っとエミリアに言うルーク。

「ええっと、お父さんからだ」っと通信に出る。

『おい、エミリア、ルーク。依頼に会った不審人物の5人がガーディアンズに捕まった。どうやらガーディアンズが巡回中に見つけたらしい。不審な5人なんだが、元ローグス3人と強盗2人だったらしい。どうやら5人で銀行を襲う計画をしていたらしい。やつらの持ち物からそれらに使う道具もあった。』

『っていう事だから、帰って来てもいいぞ。』

「っていつか、依頼を受けてたの忘れてたな。」っと右手を頭に当てるルーク。

「いろいろあったもんね。さすがにもう疲れたよ」っとエミリアが答える。

「そうだな、久しぶり凄い戦いをしたしな」っとルークも言う。

「そういえば、質問があるって言ってたね？」とディオンのルークに言うが。

「兄貴、俺が見る限り彼らは疲れてるし、長話もあれだ。日を改めないか？それにミケの説教しないと」とソロが言う。

「えっ……また……説教？勘弁してよ。」と叫ぶミケ。

「うん、僕はその意見に賛成だけど……、君たちは？」

「そうだな、とりあえず今日は帰ろうか？エミリア？」

「いいの？ルーク？まだ会って時間も経ってないのに信じていいの？」と言うエミリア。

「とりあえず、日を改めて話すことにするよ。」と答えるルーク。

「じゃ、この店で話すから……。」とルークに店の名前が書いていたパンフレットを渡す。そして、クイツと首でパンフレットにやる。

「……分かった、じゃこの店で、」と何かに気がついたルークは、パンフレットをしまいながら、言うルーク。

「じゃ、3日後に」とディオンの言う。そして、ディオンの

「さてと、ミケ、ソロ行こうか。」といい何やらボタンをいじっ

てる。数秒後船が真上に止まり、ゆっくり降りてきた。

「じゃ、3日後に」っとディオオンが右手をあげながら船に乗り、その後にはソロ、ミケが続く。ミケは少しまだ、フラフラしている。そしてミケが振り返り、頭を下げる。

ドアが閉まり、ディオオン達の乗った船は立ち去って行った。

「エミリア、俺たちも帰るか。」っとエミリアにいい、

「そうだね、帰ろうか。」っとエミリアが船を呼ぶ。ディオオン達の船とは違い、ふねが着くのは遅い。数分後、船が到着し、ゆっくり船が降りてくる。

「さあ、帰ろうか?」っとエミリアが言う。

「そうだな」っと船に乗ろうとしたが、

「????」っと不意にルークが振り返る。

「……」辺りを警戒してるのか、辺りを見渡している。

「何やってるの、置いていくよ。」

「気のせいかな?」っと警戒していたルークだが、エミリアが急かされたので、急いで船に乗る。

そして、エミリア達の乗った船が飛び立って行った。

……ガッツ!!!

? 「危ねえ、危ねえ、アイツ警戒してたよ」

? 2 「あの人、なかなかの腕前だったね。凄い戦いだっただね。それもある子供も」

? 3 「ま、俺たちの相手じゃないだろう。まだあの腕じゃ」

? 5 「でも、あいつと戦いたい。っていうか今直ぐにでも」

? 「よせ、よせ、まだ俺たちの力を見せるのはあとだ。」

? 3 「そうだな」

? 4 「はあっはあっはあ、やっと見つけたツスよ。置いくなんてひどいツスよ」

? 「わりいな、さてと、行くか」

? 2 「そうですね。私達の計画を達成するために」

第一話：依頼（終）

## 第一話・依頼4（後書き）

まず1つとして、エミリア達の船を呼ぶようにしたのは、ミケが船を壊してしまうので呼ぶようにしました。

正直に言つと、どうやってパルムに？や船はどうしたの？と書いてて思ったのでそのような形になりました。

1 1 依頼報告(前書き)

第二話では、ごぞいません。第二話が始まる前ですので、1 1に  
しました。

最初の1 は、 第一話、みたいな、ものです。

では、ごいせ。



## 1 1 依頼報告

（リトルウィング）

リトルウィングにしたルークとエミリア。そうしてエミリアがルークに言う。

「あんた、本当に怪我、大丈夫なの？」とエミリアがルークの怪我の心配をする。

「ああ、何とかな。」と答える、ルークだが……

「そんなこと言うけどさ、あの時の傷が大きくなったら……」  
つとと言う。

そう、ルークは一度、怪我をしたのである。だがルークは、

「大袈裟だよ。単なる、かすり傷だろ？」とルークは、言うが。

「あれが、かすり傷って言えたもんね。鍼を縫うほどの、怪我だったのに」

「怪我を心配してくれるのは、嬉しいが、クラウチに依頼の報告しないと。まあ、不審人物の5人はガーディアンズ達が捕まえたがな」と言うルークにたいして。

「あの3人の事、話すの？」とと言うエミリア。

だが、ルークは、

「いや、まだ言わない方がいい。彼らを知らなさすぎるからな。」  
っとルークが答える。

「でも、その怪我を見て、何か会ったって、聞かれたらどうするの？」  
っとエミリアがルークに聞く。

そしてルークは、

「よそを見たら、崖から落ちたとしても、言えればいいだろ。」  
っとルーク言う。

「……絶対信用しないと思う。」  
っとエミリアが呆れながら言う。

「まあ、その時に、言い訳を考えよう。とりあえず、事務所に行く。」  
っとルークがエミリアに言う。

「（スツゴい、心配なんですけど）」  
っと、口では言わず、心の中で思いながらルークに付いていくエミリア。

（リトルウィング事務所）  
プシュ、

っとドアが開き、事務所の中に入る、ルークとエミリア。奥には、  
クラウチがいた。

「クラウチ。今帰ったぞ」  
っとルーク。

「おう、帰ったか……。ってか、おめえ、どうしたんだよ？その怪我は？」っと聞いているクラウチ。

「これか？油断していたら、原生生物に攻撃された。」っとルークが答える。

「……。そうか。エミリアは怪我はないのか？」っとエミリアも聞く。

「あたしは特に痛いところは、ないよ」っとエミリアが答える。

「んで、何のようだ？」っとクラウチがまた質問する。

「依頼の方は、ガーディアンズが片付けたが、一応、依頼報告をしようと思ったんだよ」っとルークが答える。

そして、更にルークは言う。

「もう少し、あの辺を搜索した方がいいかもしれない」っとルークが答えた。

「えっ？」っとエミリア。

「なにっ？」っとクラウチ。

「どういう意味だ？」っとクラウチが質問する。

「……。単なる勘だ」っとルークが答えた。

「「?????」「つとクラウチとエミリアが頭の上に、?マークが浮かぶ。」

「……それより、ルーク。今日、おめえ、休みだったな?今日はもういいから、部屋で休め。今日の休日は明日にするからよ。」  
つと行つたクラウチだが。

「なあ、クラウチ?その休日、3日後にしてくれないか?」つとルークが言う。

「んっ?何でだ?」つとクラウチが聞く。

「その日、少し行きたい場所があるんだ。もしかしたら、1日になるかもしれない」つとルークが答えた。

「????、まあ、おめえさん、が3日後にしたいなら別にいいけどよ」つとクラウチは許可をした。

「(やっぱり、行くんた……)」つとエミリアが心配そうに、心の中で呟いた。

「じゃ、クラウチ。俺はこれで、失礼するよ」つとルークは、右手を上げ、事務所を出た。

ルークが部屋を出たのを確認すると、

「んでだ、アイツ、何で怪我をしたんだ?」つとエミリアに聞くクラウチ。

「えっ？あ、あいつ、いつ、言ってたじゃん。げ、原生物に攻撃されたって」っと焦りながら言うエミリア。

更にクラウドは、

「あんな嘘、ガキでも言えらあ。嘘を聞かされて、素直に、はい、そうですか？って言うわけねえだろ？だいたい、急に襲われたからと言って、あんな怪我はしないだろ？アイツならなあおさら。」っとクラウドが言う。

「うううっ、」っと更に焦り、言葉を失うエミリア。

「……、お前のその焦り様から見て、やはり、原生物に攻撃されたのは嘘だな？」っとエミリアに聞く。

もう、観念したのか、エミリアは

「うん、」

っとエミリアは頷いた。

クラウドは右手を頭に当て、ため息をつく。

「詳しいこと……話せるか？」っとクラウドはエミリアに聞く。エミリアは、コクリっと頷き、依頼中に、あったことを話した。

「なるほど、んで、3日後に会おう、ってことで、休日を3日後に

したんだな?」っと難しい顔する。

「うん・・・」っと、エミリアは、頷いた。どこか、元気がない返事だった。

「まあ、さらに詳しい内容は、アイツから聞くとして、エミリアは今日はもう、休んでいいぞ。」っとクラウドが言う。

「うん、わかった」っとエミリアは答え、エミリアも事務所を出た。事務所出てすぐに、

「クラウドに、話したんだな?」っと不意に右から声がした。

「うええっ?」っとエミリアが驚く。

声がした方を見ると、ルークが立っていた。なにやら怒った顔している。

「クラウドに、話したんだな?」って聞いてるんだ!!」っとさっきより大きな声で言う。

「あ、あたしだって、言いたくなかったわよ!!。でも、お父さんに聞かれて、仕方がなく。そもそも、あんたの嘘が、下手だから、こうなったんじゃないの!!?」っとエミリアも怒鳴る。

「だから何か?それで話してしまうのかよ!!」っとルークが言う。

ガヤガガヤ

つと回りが騒がしくなる。

すると、事務所からクラウチ、ウルスラ、チエルシーが出てきた。

「おい、ルーク！おめえ、いい加減にしるよ！！」つとクラウチが怒鳴る。

「エミリアの言う通り、正直に話さない、おめえが悪いんじゃないのか？」つとクラウチがルークに言う。

「正直に話さない？それだけ、俺が悪いのか？話せない事を聞くあんたも悪いじゃないのか？」つとルークがクラウチ言う。

「てめえつ」つとクラウチ言うが、

「ルーク！！あんた、本当にいい加減しなさいよ！！」つとまたエミリアがルークに怒鳴る。

「はぁ……、わかったよ……」

つとルークは、そのまま部屋には行かず、マイシップに入ってしまった。

「てめえ、まだ話しは」つとクラウチが言うが、ルークは無視して、マイシップに乗る。

そして、そのままどこかに行ってしまった。

「エミリアっ？アイツに酷いこと……」言われたのか？って言

おうとしたクラウチだが、

「……………」エミリアは涙を流してた。

「エミリア！！」っと心配したクラウチ。

「どうしたんだよ？本当にアイツに酷いこと言われたのか？」っとクラウチが焦って、エミリアに聞く。

「……………」エミリアは答えない。いや、答える事が出来ない。エミリアは後悔していた。無駄だと分かっていたながら、クラウチに嘘を言ったルーク。それなのに、嘘が下手だからっと言い、ルークのせいにした。いや、気にしてるのはそこではない。今までルークとあれほどまで、口喧嘩をした事がない。そして、マイシップに乗るルーク。そう、それはまるで、家を飛び出した自分と似ている出はないか。それをエミリアは気にしていた。何しろ、ルークは戦いで怪我をしている。前の傷も完全に治ってもいないにも、かわらず。エミリアはそれを気にしていた。

「仕方ねえ、ルークの方は俺が追う。エミリアはこのまま休め。いいな？」っとクラウチが言うが、

「お父さん、あたしも行く」っと言つエミリア。

「なに？」っとクラウチが聞き返す。

「嫌な予感がするの……………」っとエミリア

「嫌な予感だと？ちっ、仕方ねえ。ウルスラ、チェルシー、ちよっくら、行ってくる。留守は任せたぜ。」っとウルスラとチェルシーに声を掛ける。



「わかったわ。」っとウルスラ。

「ちゃんト、つねテ、帰って来てヨ」っとチエルシー。

そしてエミリアとクラウチはマイシップに乗り込んだ。

1 1 依頼報告（後書き）

登場人物の紹介は、次の話が終了したら、書こうと思います。

ルーク

ディオオン

ソロ

ミケ

????（次の話に登場）

の五名です（ちなみに、この登場人物の紹介はオリキャラの紹介です  
ので、エミリア達など紹介はしません。）

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

ルーク「次話もよろしく」

1 2 悲しい決断（前書き）

うん、少しずつですが、書くのが慣れました。しかし、もっと頑張ります。

では、

1 2 悲しい決断をご覧ください。

## 1 2 悲しい決断

くパルム大都市・ショッピング街く

たくさんの人で賑わう、パルム大都市のショッピング街。その中に人の青年が歩いていていた。

「はあ〜」

つとため息をつく青年。そう、ため息をついた青年はルークである。

「俺、何であんな事を言ったんだろ」

つとリトルウィングで自分が言った事を後悔していたのであった。

「あんな事を言って、更に逃げたんだ、帰りにくい」

つとなど独り言を言っていると、後ろから、

「何をブツブツ言ってるの？」つと声がした。

振り返ってみると、そこには、1人の女性だった。

「……、なんだ、お前か。」つとルークは女性に言った。

「なんだ、つとは何なの？久しぶりに再会したのに、最初の言葉はそれ？」つと女性は腕組みをしながら言った。

「ほんの二年前に会っただろ？」つとルーク。

「違うわよ、三年前よ。お父さんやお母さんの誕生日やお盆（お盆がある設定）に帰って来ないのは、”お兄ちゃん”だけだよ。」と女性が言う。

「なんと言えばわかる。俺を”お兄ちゃん”って呼ぶなって言ってるんだろ。ソラ。」

「お兄ちゃんだからお兄ちゃんって言って何が悪いの？」

「恥ずかしいんだよ！！」と女性に怒る。

ルークの話していた、女性、ルークの妹のソラ・ミル・オルテガである。

そしてソラは、

「じゃあ、何て呼んでほしい？お兄ちゃん？兄さん？それとも、デイト兄さん？」

「最後のはやめろ」っとルーク。

「……、いつまで、自分をかくすの？」っとソラ。

「……」っと黙るルーク。

「今まで”デイト”として生きてきたのに、なぜ偽名を？」っとソラ聞く。

「やっぱり、兄さん。、リトルウィングを辞めるつもりなの？」っ

とソラが聞く。

「ああ、そうだ。いや、そのつもりだったんだが……。」  
「とまた黙ってしまうルーク。」

「辞めるに辞められなくなってしまった。」「と続きを言うソラ。

「ああ、そうだよ。今、思うとなぜ偽名を使ったんだか……。」  
「と後悔するルーク。」

「じゃあ、どうするの?」「とソラが聞く。

「この先もルークとして生きるか、それとも、ルークを捨てて、デ  
イオとして生きるか」「とソラが言う。

「……。」  
「下を向くルーク。」

「お兄ち……、兄さん。」

「……俺は、」「と答えを言おうとしたルークだが、

「あつ、いたいた。ちょっとお姉ちゃん。置いていかないでよ。」  
「と後ろから男の子がやって来た。そして、

「もう、酷いよ……って、うわっ、デイオお兄ちゃん。」「と  
驚く男の子。

「よお、リオル。久しぶり」「と男の子に言う。

「ほんと久しぶりだよ。雑誌などでお兄ちゃんの活躍を見たよ。すごいねえ、亜空間事件を解決するなんて、しかも英雄だよ」「っと笑顔で言うリオル。

この男の子の名前は、リオル。リオル・ルタ・オルテガ。ルークの弟である。

そしてリオルは、

「あつ、しまった。今はディオじゃないもんね。ルークだった。」「っとリオルが言う。

「いや、ディオいい。」「っとルーク。

「お兄ちゃん?」「っとソラが言う。

「今日、限りで、ルークを捨てる。そして今日からディオで生きていく。」「っとルーク。

「いいの?お兄ちゃん」「っとソラ。

「ああ、もう決めた。……それに……。もう、あそこ(リトルウィング)には、帰れないしな。」「っとルークが言う。

「じゃあ、退社するの?」「っと聞くソラ。

しかし、ルークは、

「いや、ルークは……。死んだ事にする。」「っとルークが信じられない事を言った。

「えっ?」「っとソラとリオル。

「退社をすれば、あいつ(エミリア)が探すかも知れないし」  
「っと言うルークだが。」

「それだけは、絶対にダメ」  
「っとソラ。」

「お兄ちゃんが一番分かるでしょう?もしもルークが死んだ事にしたら、一番悲しむのは、エミリアさんよ」  
「っとソラが少し怒りがこもった言い方をする。」

「……」  
「何も言えなくなる、ルーク。」

「例え、ルークが死んだとしても、エミリアさんは信じないわ。必ず探すわよ。死んだのは嘘だと自分に言い聞かせて」  
「っとソラが続ける。」

だが、ルークは……

「あいつを使えば……エミリアも諦める。」

「まさかっ!!」  
「っとソラが声をあげる。」

「そう、あいつを使う」  
「っともう一度言うルーク。」

「そんな事したら、カイン兄さんが……それに、何よりお父さん達が許さない。」  
「っとソラが怒る。」

「カインが言っていた、俺は兄貴の血で救われた。もし、俺が助からなかったら、俺の体を利用して構わない、っと。何せあいつは俺の血で生きて、そして死んだ。」  
「っと元氣なく言うルーク。」



「カイン兄さんの奇病の件ね」っとソラが元氣なく言う。

「僕も、カイン兄さんの体の事について聞いた。承認として……。確かに言ってた。俺が死んだら体を利用していいって」「うつ向きながら言うリオル。

「でも、お父さん達が……」っと言ったソラだが。

「……もう、決めた事だ。父さんも母さんも関係ない……」  
っとルークは元氣なく言う。

「……エミリアさんは……どうするの?」っとソラが聞く。

「あいつは、もう一人前だ、俺がいなくてもやっていける」っと答えるルーク。

「……」これ以上なにも聞かないソラだった。

「まずは、髪型を変えないと。」「っと何処かに行くこととするルークに対してソラが言う。

「本当に……良いのね」っとソラが言う。

そしてルークが立ち止まりそして、「こつ言う。

「ルーク・フィレンは、今日で終わり。俺は、ディオ・ルタ・オルテガだ。それと……お兄ちゃんって呼ぶな。」「っと言って歩き出したディオ。いつも通りに言っただけだったが、ソラには分かっていた。顔はいつもの同じだったが、心はとても悲しんでいた。

ソラとリオルから少し離れた所で立ち止まり、ディオは涙を流した。そしてディオは呟いた。

「エミリア……みんな……すまない」っと。

そしてまた歩き出したディオだった。そしてディオは通信機とパンフレットを取り出した。パンフレットはディオンからもらったものであり、実はすみの方にディオンの番号が書いてあった。そしてディオは書いてある番号にかける。

『はい、ディオンです』

「どうも、ルークです」

『……ディオでいいですよ。』

「!?!?」

「なぜそれを？」

『ソラちゃんとリオル君に聞いてないんですか?』

「?????」

『彼女らは、僕達の立ち上げた部隊に入ってるんです』

「なんだって!?!?」

『驚くのも、無理がないと思います。どうぞでしょう。会っ日にちを

縮めましょうか？もちろんあなたの都合に合わせますよ。デイオさん。』

「明日……」

『?????』

「明日の10時に、この店で」

『この店とは、そのパンフレットの店ですか?』

「ああ」

『残念ですが、その店、潰れてますよ。』

「なにっ!?!?」

『僕のお気に入りの店があるんですが、その店にしませんか?』

「わかった。なんという店の名前だ?」

『ラッピーカフェと言う店です。名前は、あれですが結構人気の店なんですよ』

「わかった。ラッピーカフェだな」

『はい、あっ、いい忘れました。ラッピーカフェはパルム大都市のカフェ街の中間辺りです。』

「わかった。」

『それでは、また明日』

「まっけてくれ。」

『はい？何でしょうか？』

「そこで詳しく話してもらっかな」

『貴方も、そのつもりで来てくださいね』

「ああ、わかった」

『それでは、失礼します』

電話が切れ、ディオは通信機とパンフレットをしまい、歩き出した。

## 次回

### 第二話：嘘と真実

## 1 2 悲しい決断（後書き）

次回、第二話：嘘と真実ですが、その前にオリキャラの登場人物の紹介です。

紹介のキャラは

ディオ（ルーク）

ソラ

リオル

ディオオン

ソロ

ミケ です。

謎の5人は名前が5人登場次第書きます。 ちよくちよく謎の5人が登場してきます。 本格的活動はまだしません。

## オリキャラ登場人物（前書き）

無駄な所を省いたことにより、ページが極端に少ないです。

ディオーン「少ないのは、貴方の発想力がないからでは？」

ソロ「兄貴の名前、ディオーン。そして、英雄の名前ディオ。かなり似てるし、発想力のなさが出てる」

ディオーンとディオは、全然違うよ。マカロンとまころんみたいな。

ミケ「M S P からとりました？」

そ、そんなことはない。

ディオーン「……………（目が泳い出ますね）」

ソロ「短いが見てくれ」

あっ、俺のセリフ……………。

## オリキャラ登場人物

ディオ・ルタ・オルテガ

種族：ヒューマン

年齢：22歳

タイプ：ブレイバー

一人称：俺

髪色：金髪

服装：

イロハフブキ白×黒

今作の主人公。旧名がルーク・フィレンで今まで、エミリア達に”ルーク”と呼ばれて、いたが。実はその名前は偽名であり、本名は、ディオ・ルタ・オルテガである。ある事件により、偽名のルークで、暮らしていたが、リトルウィングで偽名を使った事を後悔している。とある、ことでリトルウィングを飛び出したことも後悔している。

無理矢理、髪型を変えたり、服装も変えた。今後はディオとして、生きていく事を決める。

ソラ・ミル・オルテガ

種族：ヒューマン

年齢：19歳

タイプ：フォース

一人称：私

髪色：金髪

服装：カグヤヒラリ

ディオの妹。

頬つぺたの上に赤い模様？みたいなものをつけている。元カーディアンズで、兄ディオが失踪したため、わずが3ヶ月で辞める事になった。再会後は、ディオには言っていないが、ディオンの立ち上げた部隊に入っている。

リオル・ルタ・オルテガ

種族：ニューマン

タイプ：ハンター

一人称：僕

髪色：茶髪

年齢：18歳

服装：

パニツシュジャケット

母親の血が多く繋がりに、ヒューマンである兄、姉とは違い、ニューマンとして生まれた。強くなりたかったので、ソラに無理を言っただいオンが立ち上げた部隊に入った。

ディオンのバーデン

種族：ヒューマン



タイプ：?????

一人称：僕

年齢：18～19歳?

髪色：銀髪

イルミナス・コート

ルーク（ディオ）とエミリアが依頼中にあつた青年。常時は笑顔み  
たいな優しい顔だが、笑顔で、凄い威圧感を出すことも出来る。自  
分の立ち上げた部隊のリーダー。ディオンにも、偽名の名前がある  
とかないとか。ある人物を追つてる。

ソロ・レスタ

種族：デューマン

タイプ：ハンター

一人称：俺

年齢：15～16歳

髪色：黒髪

服装：

ブレイブスコートシリーズ（黒×暗い青）

ディオオンが立ち上げた部隊の副リーダー。ディオの前で、自分の強  
さを見せてないので、ディオはソロの強さを知らないが、相当のや  
り手。ミケに対してかなり厳しい。

ミケ・ラン・ジャータン

種族：ヒューマン

タイプ：ブレイバー

一人称：僕

年齢：10歳

髪色：青髪

服装：

ジャツジメントコート

ディオ（ルーク）とエミリアを襲った張本人。ヒューマンでナノブラストを使える。油断したせいか、ディオ達にやられる。そのあと、無理矢理ディオンに誤らさせられた。何故、ディオ達を襲ったのか、まだディオに言っていない。

## オリキャラ登場人物（後書き）

ソロ「なあ、兄貴？これだけで、俺達の事をわかってもらえるか？」

ディオソ「まあ、自分達がこのような人物だと、今後の話で、わかってもらえれば、いいと思いますよ。」

ソロ「じゃ、書く必要なかったんじゃない？・・・」

ディオソ「あるのとないのでは、違いますからね。」

ソロ「確かにな。んっ？作者がいないな？」

ディオソ「彼なら、ディオ君と呼ばれて、出掛けましたよ。」

ソロ「おいおい、・・・締めはどうするっ？」

ミケ「僕がやるよ。誤字、脱字がありましたら、お願いします。」

## 第二話：嘘と真実1（前書き）

第二話です。ほとんどが会話になってますが、気にしないでください。

ディオ「確か……この辺のはず……あ、あっちな」

では、ごうござ

## 第二話：嘘と真実 1

くパルム大都市・カフェ街く

カフェ街に、ディオがいた。ディオと話をする日になったのだが、ディオは、キヨロキヨロしている。

「確か……、この辺のハズなんだが……」

どうやら、ラッピーカフェを探しているらしい。つとそこへ、

「もう少し行った先の黄色い店ですよ」つと後ろから声がした。振り返ってみると、ディオがいた。どうやら声の主はディオだったようだ。

「あつ、ああ、そうか」つとディオは、答えた。

「ん？あんた1人か？」つとディオがディオに聞く。

「ええ、ソロとミケは、ある調査をしてもらってます。」

「????。ある調査？」

「詳しい話は、店で話します。さて、行きましょう」つとディオは、約束の店である、ラッピーカフェに向かつていった。ディオは

その後を付いていく。

くラッピーカフェく

ガチャ、

『いらっしやいませ！！何名様ですか？』つと定員が答える。

「二名です。」つとディオオンが答える。

『では、こちらのお席になります』つと定員がディオオン達を席に案内する。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

水とおしぼりを持ってきた定員が、

『ご注文が決まりましたらお呼びください』つと定員がディオオン達の席を離れる。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「なかなかの店だな。」つと感想を言うディオオン。

「それだけではないよ。味もいいんだ」つと答えるディオオン。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「……にしては、少し騒がしいな。」

「あれが、原因だと思うよ」 つとディオオンが指を指す。その先にはモニターがあった。モニターには、グラールチャンネル5がやっていた。どうやらニュースの内容で、ガヤガヤしていたらしい。

『リトルウィングのルーク・フィレン、失踪。今現在、リトルウィングのメンバーがルークの搜索するも、ルークの居場所、確認出来ず。』 つとニュースが流れていた。

「……」

「帰らなくて、いいのかい？」

(少し、会話だけになります)

「ああ、」

「偽装死亡……止めたそうだね。ソラちゃんに聞いたよ」

「ああ、やっぱり、悲しむ人を見たくない」

「あれほど、ルークは死んだ事にするって言ったのに、なんで？」

「……夢を……見たんだ……」

「夢？」

「エミリアの夢だ……。俺が偽装死亡したことにより、エミリアが凄い落ち込むんだ。いや、それだけじゃない。俺は、偽装死亡したことにより、エミリアの笑顔を奪ったんだ。それで、エミリアはもう、笑うことはなかった」

「だから、偽装死亡は止めたのかい？」

「偽装死亡をするつと言った自分がバカみたいだ。（ミカに、エミリアを守って、つと言われたのにな）」

「まあ、いいんじゃないかな？そういうのは、夢に限るよ。」

「ああ、そうだな。」

「それより、何か頼も。何飲む？」

「そうだな、カフェオレにしよう」

「じゃあ、僕はホットコーヒーにしよう」

定員を呼んだディオンは、それぞれ注文するやつを頼み来るまで、例の話をする。

「ディオオン、早速話なんだが」

「待って、」つとディオオンが話を止める。

「どうした？」



「ディオオンじゃ、君と被るから……そうだな……ルークにしてくれる?」

「ふざけるな」

「ごめん、ごめん。冗談だよ。ディックつとよんでくれるかい?」

「ディック?」

「僕のもう1つのなまえだよ。ディック・ハリンソン。僕の偽名の名がこれだよ。」

「なぜ、偽名で呼ぶんだよ……」

「だから言ったでしょう?被るからだよ。」

そう、話をしていると、注文した物を持ってきた定員に注文した物を渡され、席から離れる定員。

「つで、まず聞きたいのはあるかい?」つと言つディック。

「あんた達の目的はなんだが」

「目的……か」つとコーヒーを飲みディック。

(会話だけになります)

「実は、僕達は妙な動きをしている5人をおってるんだ」

「妙な5人?」

「君たちが、依頼を受けたのはなんだったかな？」

「怪しい5人の調査。だが、それは元ローグス3人、強盗2人で、それと関係ないぞ？」

「いや、関係あると思うよ。」

「!?!？」

「依頼を受けた、怪しい5人がその5人じゃなかったとしたら・・・」

「!?!?!」

「そう、その依頼は、まだ終わってない」

「ま、まさか」

「しかも、その5人が、僕達の追っている5人の可能性もあると思うんだ。」

「(あの時の、妙な感覚はこれのことか?)」

「まあ、決まったわけじゃ無いけど、その可能性が大だね」

「そいつらの名前を知ってるか？」

「いや、今それを調査をしている所なんだ。ってな、訳で、それ以

外なら、話せるよ。」

「なぜ、その5人を追ってるんだ？」

「……、このグラールを救うため」

「なにっ?」

「彼らは、このグラールを支配する可能性のあるだ。」

「なぜ、わかるんだ? 調査中なんだろう?」

「彼らに、嫌なオーラを感じたんだ。」

「嫌なオーラを?」

「うん、」

「でも、それだけグラールを支配する奴らって決めつけるなど」

「……確かにね。支配だけで終わればいいけどね」

「どっこういうことだ?」

「彼らを調査中つと言っても、全然わかってないって事ではないんだ。」

「じゃ、少しならわかるのか?」

「うん、彼らは一人一人それぞれ違う種族だと言ったこと。彼らに嫌なオーラを感じた事ぐらいだね。」

「でも、それだけで、そいつらを悪者にするのは……」

ピピピピピピ

「あっ、ごめんね」

っと、ディオに謝り、通信に出るディック。

「はい、ディックです」

『……ディックって、なんで偽名使ってただよ兄貴。』

通信相手はソロだった

「ディオ君と似てるからね。だから偽名の方につかっただ。」

『オレとミケは分かるが、他の奴らならどうするんだ。ビックリするぞ』

「ごめん、ごめん、気を付けるよ。っで、わかったのかい。」

『なあ、そこにディオの兄貴がいると……っっているみたいだな。なら丁度いい。ディオ兄貴も聞いてくれ』

「どうかしたのかい？」

っとディックが聞く。

『あの5人。やはり、兄貴の言う通り、このグラールを支配をするつもりが高い。』

「やっぱり、そうだったんだね。」

(話の内容は、ディオとディックにしか、わからないように、通信の前にイヤホンを付けてます。)

「名前は、わかるか？」

「とディオがきく。」

『いや、あいつらなかなか仲間の名前を呼ばない。警戒しているのか、「君、お前、お主、」で読むで。』と答えるソロ。

「そうか。ありがとう」

「とディックが言うが……」

『それともうひとつ』と真剣な顔と言い方でいう(通信機は画面?が写る通信機ってわかるかな?)。

「どうしたんだ?」とディオが聞く。

『さつき、奴らの目的は、グラールの支配って言ったが、どうやらそれはおまけらしい。』と言うソロ。

「何?じゃ、その5人の本当の目的はなんだ。」

『……兄貴には、5人それぞれ違う種族ってのは聞いたか?』

「ああ、聞いたが、それがど……」と言葉が失う。

「もしかして……」  
ディックがソロに聞く。

『ああ、間違いない……あいつら種族戦争を起こすつもりだ』

「なんだって」「っと声を上げてしまつてディオ。その声に、反応し  
ディオに向く、客。

「すみません」「っと謝り、小さい声で、ソロに聞く

「ま、間違いないのか？」

『ああ、あいつらそんな話をしていた。……聞き間違いであっ  
て欲しい。』っと悔しそうに答えるソロ。

『それに、あいつらの嫌なオーラの意味もわかった』

「なんだい？」っと聞くディック。

『あいつら……転生を使ってる』

「転生だって？」

っとディックが聞く。

『ああ、間違いない。凄いオーラを感じる。……勝てないオー  
ラを……』

「……わかった……ありがとう。もう引き上げてもいいよ」

『わかった。これより帰還する』

少し間があく、すでに2人の飲み物は空だ。

「大変な事になったね」

「ああ」

「……」

「……」

「さてと、話の続けよ……」と通信前の話をしようとしたが、

「あんだ、いいのか！ 種族戦争だぞ。そんな事が起きたら、世界がほろびるんだぞ」 っとディックに怒る。

ディックは

「わかってるよ」なぜか落ち着いてる。

「なぜ、そんな落ち着いていられるんだ。」 っと聞くディオ。

「なぜって、あいつらにはまだ、種族戦争どころか、グラールの支配さえ出来ない。」 っと答える。

「えっ?」

「考えてみなよ。今のグラール。みんな種族差別なく生活してるで

しょう。まず種族差別をするには、グラールを支配する必要がある。だけど、このグラールには、ガーディアンズ、同盟軍、ローグス、リトルウィング。SEEDを封印した英雄のイーサン・ウエーバー。……そして……亜空間事件を解決した英雄、ルーク・フィレンこと、ディオ・ルタ・オルテガ。君たちの力が統一すれば大丈夫だよ」つと答えるディック。

「凄い自信だな？」

「自信じゃない……答えさ。この世に強い絆を持てば、不可能を可能に出来る。君たちのその強い絆を力に変える。それが唯一、グラールを救う事であり、彼らに対抗出来る力。それが絆さ」

「……」つとディックの言葉に言葉が出ないディオ。

「一人で戦うなんて、バカな事を考えない事だね。」

「あいつら、転生してるんだろ？」

「転生してるから、絶対に強くなるとは限らない。転生して、強くなったつと考えると必ず怪我をする。転生しても、かなり努力しないと、強くは慣れない。それに転生しても、必ず強くなる保証はない。逆に弱くなるかもしれない……。」つと悲しそうに言う。

「？」つと疑問そうにするディオ。

「昔いたんだよ、僕達の部隊に、転生して強くなったつとっていい張って死んだ仲間がね。全くバカなやつだよ。」

「……」



「グラールを救うためにはまず絆を掴まなければならない。今のグラールの絆よりも大きな絆が。彼らに支配されると、絆は簡単には崩される。そうなる前に……」

「そうだな。」

「ところで、エミリアちゃんから通信……来ないね。心配してるはずなのに」

「エミリア達の通信は拒否にしてるからな。」と答えるディオ。

「そっか、」

「……」

「……」

「まずは……、」

「??？」

「あんたの話を聞くのが先だったな？」

「そうだね」「っと店員を呼び。」

「??？」

「コーピーのおかわりください」

「あっ、俺も」

『はい、かしこまりました』 つと店員がディオ達の席を外した。

「それじゃ、話そうか。僕達の絆を深めるために」

## 第二話：嘘と真実1（後書き）

ディオ「嘘と真実にあまり関係ないな」

なに、これからですよ。まだ1番目だから。

ディック「それは楽しみですな」

でしょう。君となら話が会つかも

ディオ「はあ〜」

ピピピピピピピ

ディオ「??」

通信？

ディック「僕だ」

ピッ

ソロ「誤字、脱字があったら教えてくれ」

## 第二話：嘘と真実2（前書き）

もう、ほとんどが会話です。

ディック「コーヒーおかわり」

ディオ「俺も、」

ちなみに飲み放題です。セルフサービス出はなく、店員が運ぶ珍しい店です。

店員『それでは、嘘と真実2、御覧下さい。』

## 第二話：嘘と真実2

（リトルウィング事務所）

「どうだ、見つかったか？・・・わかった。調査を続けてくれ」

ピッ

「はあく、あの馬鹿、何処に、行きやがった。」っとクラウチが腹をたてている。そこへ、

「クラウチ、ルークは見つかったの？」っとウルスラがクラウチに聞く。

「いや、ルークが乗ってた船なら見つかったんだが、肝心の居場所までは、まだまだそうだ。」右手で自分の頭をかくクラウチ。

「チエルシーは、店に来る客に聞いてるそうなんだけど、今のところ手応えがないみたい」っとウルスラも答えた。

「ナギサの方も数分前に、通信があったんだが、手応えがねえそうだ。」

「そう、何もなければいいけど」

「ところで、・・・エミリアの様子はどうだ？」っとクラウチが

ウルスラに聞く。

「いつもと変わらないわ。」っとウルスラが答えた。

「そうか。ルークがいなくなって、駄目になるかと思ったがなあ。」

「『今度は、あたしがルークを助ける番』っと行って、探しに行っ  
たわ」

「ホント、変わったよな。あいつ。」

「彼のおかげよね。あの子が変われたの」

「ああ、そうだな」

「……」

「んっ?どうした?」

「な、何でもないわ。」

「???」

……数日前

「ルーク、ちょっといいからしら。」

「えっ?あ、はい。なんですか?」

「エミリアの事なんだけど」

「エミリアがどうかしたんですか？」

「別にどうかした分けではないわ。」

「はい？」

「あの子が変われたのは、自分のおかげでだ、って考えたりする？」

「いえ、ただ俺は、エミリアの変わることをサポートしただけで別に俺が変えたわけでは、ないですよ。．．．なぜそんなことを？」

「前も、エミリアについて話した事、覚える？」

「同じような、話した気がしますね」

「そうね、じゃその後の話した事、覚える？」

「クラウチの家族の話？」

「その前よ」

「．．．．、あなたが、ふとっ彼女の前から消えるんじゃないかって、話ですか？」

「その通りよ」

「……」

「ルーク？」

「大丈夫ですよ。エミリアの前からいなくなったりしませんよ。」

「それを聞いて安心したわ。……いつまでもエミリアを守ってあげてね。1人でいるのは、寂しいと思うし、何よりあなたのパートナーでもあるからさ。」

「任せてください」

「頼もしいわ」

……現在

「（あの時の話が現実になるとは、思わなかったわ。）」

「ウルスラ、大丈夫か？」

「えっ？ええ、大丈夫よ。それより、クラウチ、エミリアからの通信はあったの？」

「いや、まだだ。もう少しだと思う……」

ジュジュジュジュ



「「！！！！」」

「も、もしもしエミリアか？どうだった……どうしたエミリア？何で泣いてるんだよ？何？ルークを見つけただと？それでなんで泣いてるんだ？………どういう意味だよ、それ………」

……数時間前

くラッピーカフェく

「なるほど、そういうことだったんだ」

「驚くのは、当たり前ですからね」

ディオとディックが雑談をしている。

「ところで、ミケの、『だよね〜』ってのは、なんだ？」とディックに聞く。

「ああ、それ？単なる癖だよ。」と答えるルーク

「癖？」

「たまに、やるんですよ。相手を馬鹿にした言い方。やめなさいっと言っても聞かなくて」

「ミケのヒューマンのナノブラストは？」

「転生に失敗したんだ。」

「転生に失敗した？」

「僕達の転生機械はヒューマンはヒューマン、ニューマンはニューマンの専用の転生機械なんだ」

「っで、間違えて、ビーストで転生したわけだ。」

「そういうこと。まさか、成功するとは思わなかったよ。今後こんな事がないように壊したよ。あっ、もう結構時間だったね。もうこの辺にしようか？」

「2ついいか？」

「なんですか？」

「あんだ達の部隊の名前は？」とディックの立ち上げ部隊に、ついて聞く。

「部隊の名前？そつえば言つて無かつたね。僕達の立ち上げた部隊の名前は、【一種族】部隊つて言つんだ。」と答える。

「えっ？い、一種族部隊？なんだよ、それ？」

「もともと僕達は、一種族だったのは、知ってる？ヒューマンによつて、ニューマン、キャスト、ビーストが造られ、そして各各種族の関係が悪化し戦争が起きた。戦争は終わつても、しばらくの間は、種族差別は続いたと思う。デューマンという新たな種族も誕生した。

今は種族差別つと言ったものはないけど、もし、種族差別があったとしたら、種族をなくし、皆が一種族になれば、種族差別もなくなると思うし、戦争も起こらないと思う。そういう意味合いもあって一種族部隊にしたんだ。」っとディックが答えた。

「一種族か……」

「例え一種族になっても差別は続くと思う。僕達は差別つと言ったものを無くしていきたい。種族差別が起きた場合、グラールが滅び、戦争が始まる」

「……」

「そうなる前に、彼らを倒さなければ。」

「そうだな。」

「もう1つ聞きたいことはなんだい？」っとディックが言い、

「あんたも転生してるのか？」っとディオが聞く。

「うん、家の部隊で転生しているのは、僕と、ソロ、ミケの3人だよ。」っとディックが答えた。

「わかった。」

「そろそろ、話も終わりにしよう。」

「そうだな。」

「何かあったら、連絡するしつ連絡先教えるから。」

「あんたからも連絡しろよ」

「わかってますよ。」

お互いに連絡先を交換する。

「じゃ、失礼します。お金の方は僕が払いますので」

「いいのか？」

「大丈夫ですよ。では、失礼します」つと会計をし、店を出たディック。そして、その後すぐに、ディオも店を出た。

〈パルム大都市カフェ街〉

ここに1人の少女と1人の少年が歩いていた。何やらぶつぶつ言いながら、歩いている。

「ルーク……どこに行ったの……」

あまり元気のない言葉だった。

「エミリア。大丈夫か？」

つと少年が少女に声をかけた

「えっ？あ、うん、ごめんね、ユート。大丈夫だよ」

エミリアとユート、どうやら少女と少年はこの2人のようだ。

「エミリア、ルークがいなくなって、元気がないぞ。」っとユートが言う。

「だって、ルークがいなくなったの……」

「エミリアのせいじゃないぞー!!」っとユートが言う。

「えっ？」

「クラウドだって、お前のせいじゃないって言ってるし、ルークだってそんなことを言うはずない」っとユートが言ったのだが

「何で、あんたがルークの思ってることがわかるのよ。」

「匂いでわかる。あいつには、そんなことを言わない匂いが。」

「そんなんでわかるわけないでしょう!!」っと怒鳴るエミリア。

「今、気にしてるのは、あたしが、お父さんに嘘を言っとけば、こんな事にはならなかった。それに……あんぐらいで怒って飛び出したルークに怒ってやるんだ。」っとエミリアは言った。

「エミリア、お前なんだかルークみたいだぞ?」

「えっ?」

「エミリアがいなくなった時のルークに少し似てる。」

「でも、ルークみたいに強くなれない。」

「エミリアもずいぶん強いぞ。」

「うっん、あたしは強くないよ、お父さん達が心配しない様に、強くみせてるだけ……」と話していたエミリアだが

「この匂い……」

「えっ?」

「この匂い……ルークの匂いだ」っと走り出すユート。

「えっ?ちょ、ちょっと待ってよユート。」ユートを追いかける、エミリア。

「あそこだ。あそこにいるぞ」っとユート

「はあ、はあ、ルークー!」っとエミリアが呼ぶ。

……しかし

「……」ルークと呼ばれた青年は無視して歩く。ルークと呼ばれた青年……そう、エミリアのパートナー、ディオ(ルーク)だった。

「ちょ、ちょっと、ルーク！！」と言ったエミリアだが

また、無視して歩くディオ（ルーク）

「お前！！」っとユートが走ってディオの腕を掴む。

そして、

「お前ら……だれた？」と言ったディオ（ルーク）に驚く2人

「誰って、何言ってるの？ルーク。」と言ったエミリアは、泣き  
そうな声で言う。

「ルーク？悪いが人違いだ。俺の名前はルークじゃない」  
「っと言い  
ユートの手を自分の腕から優しく離させる。

「あんた、何言ってるの！！もしかして、まだ怒ってるの！！？」  
エミリアの目から涙がてできた。

しかし、ディオは

「あんたもしつこい人だな、俺はルークじゃないっていつてんだろ  
！！」  
「っと怒鳴るディオ（ルーク）。

「ルーク……」

「まったく、」  
「っと言い歩き出すディオ。そして惑星移動の大型船  
（電車みたいな乗り物）に乗るディオ。

「ルーク！！」  
「っとエミリアが走り、今度はエミリアがディオの腕  
を掴む。

「いい加減にしろ!!」っとおもいつきりエミリアの手を離す。

「!!!」っと驚くエミリアを無視して船に乗るディオ。そして船は飛び立っていった。

「ルーク……」っと膝を地面に付け、顔を手でおさえ、泣くエミリア。

「エミリア……」ユートはエミリアに言葉をかけようとしたが、やめた。こういう時、なんと声をかけたらよいのかわからなかったのである。

っとその時、

エミリアがクラウドに通信をした。

「もしもし、お父さん。」

『も、もしもしエミリアか? どうだ? ……どうしたエミリア? 何で泣いてるんだよ?』

「実は、ルークを見つけたの。」

『何? ルークを見つけただと? それでなんで泣いてるんだ?』

「もう、ルークは……ルークじゃない。あたしの知ってるルークは……もう、何処にもいない!!」

『……どういう意味だよ、それ……』



く  
く  
く

『……わかった、お前ら、とりあえず、戻ってこい。』

「わかった」

「大丈夫か？エミリア」っとユートがエミリアに聞く。

「うん、大丈夫。とりあえず帰る。」っとエミリアとユートは船に向かって行った。

その光景を見ていたディックが。

「本当に、よかったんですか？ディオ君」っと呟いた。

## 第二話：嘘と真実2（後書き）

まだまだ嘘と真実は……

ユート「お前がエミリアを泣かしたな!!」

な、泣かしたのはルーク（ディオ）で

ユート「ルークがエミリアを泣かすわけがない」

ちよ、ちよっと、待てユート話を……ぎゃ〜

エミリア「……」

ディック「誤字、脱字がありましたら、教えて下さい（ぼそぼそ）」

## 第二話・嘘と真実3（前書き）

もう、ほとんどが、会話になっています。

## 第二話・嘘と真実3

「モトブウ・カジノシティ」

「……………」

「わいわい、

「……………」

「がやがや

「どうやら、船を間違えたな。」  
「つとディオは右手を顔に当てた。」

「ま、せっかく、カジノに来たし、少しだけやるのかな？」  
「つと考えていると。」

「ルーク……………さん？」  
「つと声がした。」

不意に、偽名の名前を呼ばれたので、ディオは振り返ってしまった。

あっ、っと思っただが、すでに遅かった。

「やっぱり、ルークさん!! どうして、こんな所に? リトルウィングからいなくなったって、エミリアから搜索の手伝いをしての通信がありましたよ!!」声をかけた人物。それは、ガーディアンズのルミアだった。

「お、俺はルークって名前じゃない。」っと思っただが……。

「では、何で振り返ったんですか?」

「う、後ろから、声をかけられたら、普通振り向くだろ?」っと思っただが、

「知らない方の名前だったら、普通、振り返りませんよ。」っと思っただが、

「……」何も言えなくなってしまった。

「ルークさん?」っと思っただが、

「仕方ない、……久しぶりだな。ルミア。元気だっ……」  
「だったか、っと思っただが、」

「ルークさん！それよりも何で、リトルウィングを飛び出し、失踪をなんてしたんですか？それよりも、何で、ここに？」

「君こそ、何で、ここに？君が来るような場所じゃないぞ」

「ルークさんも同じですよ。ルークさんもこのような場所に来るような所じゃありません」

「話せば長くなる。……すべて話せないが、話せる所まで話させてくれ。」と云うディオ。

「わかりました」っとルミアは答えた。

「立ち話もあれだし、あの店で話すよ。」っとその店に歩いていくディオ。そのあとをルミアがついていく。

101

く喫茶店

数分後

「そういう事だったんですか。」っとルミアが言った。

言った内容は、自分の名前についてだけ。まだ怪しい5人の話をし

ない。まだ正しいと決まった分けではないし、かえって混乱するの  
で、自分の名前だけ話した。

「じゃ、これからディオさんって呼べばいいんですね」

「ああ、頼む。あと、エミリア達やガーディアンズの他の連中には  
秘密にしてくれないか？」

「わかりました。その代わり……」とルミア。

「その代わり？」と聞くディオ。

「何か奢って下さい。」  
とルミアが言う。

「奢るだけで、いいのか？」と笑いながらディオが言う。

「はい、もちろん高いのを食べますよ。」と答えたルミア。

「秘密にしてくれるなら、それぐらい構わない。」と言うルーク。

（モトブウ、カジノシティ）

「ところでルミア？」「ディオがルミアに質問する。

「なんですか？」

「さっきも言ったけど、何で、君がここに？」  
「どうやら、会ったときの話のようだ。」

「ああ、それですか？実は他の任務で来てたんです。」

「他の任務？」

「カジノで悪質な手を使い、メセタを儲けてる犯人を捕まえに来たんです。犯人を捕まえた後に、あなたにあったんです。」

「そうだったんだ。」

「ルー……ディオさんは何で、ここに？」  
「ルークって言いかけた、ルミア。」

「……船を間違えた」

「えっ？船を？」

「ああ、」

「ふっふっふ、」  
「っとルミアが笑う。」

「な、何がおかしい？」

「ディオも笑いながら聞く」



「あなたもそんなミスをするんだなって」

「俺も、1人の人間だよ。失敗したりする」

「……リトルウィングを抜け出したのは「っと少し小さめな声で聞くルミア。」

「……さあ、俺も、わからない。」

「……」

「……」

「ディオさん……」

「何だ？」

「いなくならないで下さい（小声）」

「えっ？」

「何でもありません。それでは、失礼します」

「ああ、」

つとルミアは走って立ち去っていった。先に行かせたガーディアンズを待たせているのだろう。

「さあ、俺も、行くか。」っとディオもこの場を離れた。

く?????

?「……………」

?3「……………」

?2「君たちその辺にしなよ。」

?4「そ、そうッスよ。今はもめてる場合じゃないッスよ。」

?「……………ちっ」

?3「ふん、今日は勘弁してやる」

?「今、戦っても、いいんだぞ?」

?3「面白い、相手になつてやる」

?5「よさねえか、お前ら。喧嘩ならどこか行ってやれ」

?2「だから、今はもめてる場合じゃないって。」

?4「みんな、仲良くいくッスよ」

? 「……………」

? 3 「……………」

? 4 「さあ、握手ツスよ、握手。」

? 3 「……………」

ト  
ト  
ト

? 2 「あ、ちょっと待ってよ」

? 4 「何で、仲良くできないツスかね」

? 5 「さあな。」

? 「（人形め、俺の考えた計画をバカにしやがって）」

? 4 「何やってるんツスか？置いていくツスよ」

? 「（まあいい。あの馬鹿を殺して、違うやつを呼ぶか。どうせ、代わりは、たくさんある。）」

? 「バリン、ちょっといいか。」

バリン（? 3） 「なんだよ」

? 「お前ら、先にいってくれ」

? 2 「わかりました」

? 4 「早く来てくださいッスよ」

バリン 「なんだよ、用っ……」

グサツ

バリン 「!!!!」

バシユツ

バリン 「!!!!き、きさ……」

グサツ、バシユツ、グサツ、バシユツ、グサツ

バリン 「や……め」

? 「消える。」

ドーーーーーン!!

? 「……」

？「（所詮、人形は人形か。）」

ピッ、ピッ、ピッ

？「俺だ、バリンが死んだ。早急に代わりをよこせ。今度はゴミを寄越すな。きちんとしたやつをよこせ。じゃな。」

？「やつ（人形）の代わりが来るまで、どうしようかな？……ルークとやらと、遊ぶか。いずれ戦うはめに合う。先に殺しておくか。奴らが奴を失えば、こっちのもんだ。」

ゾクッ、

「……な、なんだ、この感覚は……」

（一 種 族 部 隊 ・ 拠 点）

「ディオの兄貴に俺達の事を？」

『嘘、偽りなく、正直に話したよ。彼も疑わなかったよ。』

「そうか、それは、よかった。話がわかる奴で。」

『本当、よかったよ。やっぱり真実を言うのは気持ちいいね』

「兄貴は真実がほとんどだし、嘘はあまり言わないもんな。」

『……嘘は、そのうちバレ、その人からみんな離れていく。嘘はたった1つで絆を切らしてしまう可能性があるんだ……』

「兄貴？」

『（ディオ君、偽りは……ほどほどに頼むよ……。君が必要なのは、僕達じゃない。リトルウィングの皆さんだよ）』

第二話：嘘と真実（終）

### 第二話：嘘と真実 3（後書き）

第二話：嘘と真実終了です。

謎の5人の1人が死にましたね。今は4人ですが、また5人になります。

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

## 2 1 行動開始（前書き）

第三話はもう少ししてからです。

ついに謎の5人の1人が行動開始。

どうぞ、ご覧ください。



## 2 1 行動開始

く???.???

ここに、2人の人がいた。何もなく、来ても意味のない場所。そして、

?「今日からお前は、俺達の仲間だ」

?3「バリンさんの代わりに、頑張ります。」

?「バリンの代わりにしなくていい、自分の力で頑張ってくれ。」

?3「わかりました」

?「敬語は使わなくていいぞ。さてと、あいつらの所に行くんだが、俺は用事がある。先に行ってくれ、場所はここだ。」

?3「了解!!」

?「また、後でな。」

くパルム大都市く

ここに、1人の青年がいた。惑星移動船（バスみたいな感じ）を間違えたので、パルムに戻って来たディオ。しかし、

「うーん、自室に忘れ物をした。」

「船はないし、taxi船に乗って、いやいや、ならクラッド6行きのbus船に乗るか、人ゴミに隠れて行った方がいいかも。依頼最近多いから大丈夫だろ……。多分」っと心配したが、とりあえずリトルウイングに帰ることにしたディオ。そして、クラッド6行きのbus船に乗った。

くリトルウイング・ロビーく

「（やっぱり、人が多いな）」

リトルウイングに着いたディオ。そして、

「（ここでバレたら一巻の終わり、気を付けて進もう）」回りの目を気にしながら、自室に向かうディオ。そして、

「（やべ、バスクだ!!!）」　　っと思わず、顔を反らす。

「んっ？」

「（き、気付かれたか？）」

「お前、」

「（終わった……）」

「こっちは、我々の家だぞ。<sup>マイルーム</sup>事務所はあっちだ。」と事務所を指を指す。

「（あぶね〜）……コクリ」<sup>と頷き、事務所を向かい振りをして、バスクが何処かに行ったのを確認すると、急いでマイルームに向かった。</sup>

「あぶね、バレる所だった。とりあえず……大丈夫……だよな」<sup>つと不安はするが</sup>

「とつとと、済まして帰る」

（ルーク・マイルーム）

プシュー

「（よかった、開いたよ）」

自分のカギで開くか心配をしていた。何しろリトルウィングを飛び出してカギを変えたか心配をしたからだ。

「（俺がいつでも帰って来てもいいように、ってことか？）」「っと考えた。ルークのパートナーマシナリー（以後PM）は調整中だ。

「さつさと、持って帰る。」「っと奥に進む……。だが

ゴト、

「！！？（誰だ？）」「っとディオは慎重に音をたてずに歩きそして音をした方へ顔を覗かせる。

？「待ってたぜ、ルーク」

「！！？誰だ」

？「失踪したのに、ここにまさか帰って来るとは、勘を頼るものだ。」「

「質問に答える！！」  
「っとディオが言う。

？「口がわりいくなあ。もう少し利口なしゃべり方をしろよ」「っとばかにした言い方で言う。

「お前も一緒だろ？」

？「俺はそんなに口は悪くない。」

「そんなことはいいい、質問に答えるー！」

？「声、出してもいいの？お前が帰って来たことがバレるぞ。」

「答えるって言うてるんだ。」

「仕方ない、俺の名前は、ルーティン。ルーティン、インガム。みての通りヒューマンだ」つと言うルーティン。

「偽名か？」つとディオ

「お前とは、違う。俺は偽らないからな。」

「！ー！？なぜそれを？」

「教える、必要はない。どうせ死ぬんだ。ここで」

「俺をあまりなめない方がいいぞ。」つとシップウジンライを構える。

「やれやれ、こんな場所で戦うなんて・・・ま、いいか、どこで戦っても死ぬんだから。」つとルーティン

「なめるなって言うてるんだよ。」つとディオ。

「じゃ、戦ってみるか？もう、結果は分かるけど・・・。」つと

い、武器を構える。

「なめるな!!」っとルーティンに襲い掛かる。しかし、

カッキ〜ン

「ツツ!!」

「やるな」

手を上下に振る。どうやら手が痺れたらしい。

そして、少し離れるディオ。ルーティンが持っていたのは、

「なんだ、その武器?」

「これか?武器屋のオヤジに頼んで作ってもらった。その名も”ブラックソード”だ。」

「名前にセンスがねえな」

「はっはっはっは、名前より、その武器の効果さ」

「なに?」

「この武器は、相手の力を二倍を利用する武器だ。」

「なに?」

「分かりやすく言うと、お前の攻撃して、俺がお前の攻撃を受け止

めたでしょう。その受け止める威力の二倍＋俺の威力。更に攻撃の威力は、受け止めた威力の二倍＋俺の威力、つまりだ、お前の威力を二倍して利用をさせてもらうって事だ。」

「そんな技術、聞いた事はない」

「そりゃそつさ、俺はこの世界の人間じゃねえからな。」

「なんだと？」

「この宇宙に、あの3つの惑星だけではない。あの3つの他にも惑星がある。宇宙は広いからな。それに、この世界の技術は……ゴミだ。」

「なんだと。」

「こんな技術じゃ、俺には勝てない。俺の世界の技術は、これ以上……いや、はるかに上だ。それに、グラール1位、2位の頭脳を持つ……えっと、エリアンだったか、リリアンだかわからねえが、俺の世界じゃ……クソだ。」

プチッ

ディオの方で何かがキレる音がした。

「てめえ……調子に乗るな！！俺をコケにしようとバカにしようとか構わねえが、仲間をバカにするな。エリアン？リリアン？相手が

「の名称はエミリアだ！！」

「そうそう、その名前。あの頭脳じゃもっと努力が必要だ」

「もついい、貴様をここで殺す！！」

「面白い。来いよ。実力の差を見せてやる」

「俺をなめるな！！！」

（リトルウィング事務所）

「帰ったか。」っとクラウチがエミリアが事務所に入って来たのに気が付いた。ユートは修行をするって事で、村に送って帰った。

「……」エミリアはなにとも言わない。

「大丈夫か？」っとクラウチが聞く。

コクリツ っとエミリアが頷く。クラウチはこれ以上聞かなかった。そこへ

ブシュー

「帰ったぞ」っとデューマンの女性が入ってきた。



「ナギサか？どうだ？何か情報が手に入ったか？」っとクラウチがナギサに聞く。

「貴方に、通信で伝えた通りだ。」っとナギサは答えた。

「そうか……。」

「それより、エミリアはどうした？元気が内容だが？」っとナギサが言う。

「ああ……。」っとクラウチが言おうとしたが、しかし、

「実はね……。」っとエミリアが言った。

「エミリア」っとクラウチが言う。

「くよくよしても仕方ないもん。もう……過ぎた事だし……。」

「?..?」

「ナギサ……実はね……。」っとエミリアが言おうとしたが、

ドタドタ、ドタドタ、

プシュー、



「……………!!!!」

あちこちに、血が飛び散っており、部屋は散らかり、壁にはキズや穴が空いている。さらにルーク（ディオですが、しばらく、ルークになります）の体に無数の傷が付いていた。

「ルーク!!」 エミリアが呼んだが、返事はない。

「ルーク!!」

エミリアがルークに近寄り、身体を起こすが、

「エミリア!!あまり触るな!!」 っとクラウチが言う。

「だって、だって」 エミリアは涙を流している。

「クラウチ、とりあえず、ベッドに寝かせましょう。」

「わかった、チェルシー、事務所から医療用バックを持ってこい。  
ナギサは医者を呼べ」

「わかった」

「了解ネ」

2人が部屋を出る。

つとそこへ、

プシュー

「兄貴、遅かったみたいだぞ。」

「うん、彼らもついに動き出したみたいだね。」

「兄さん、それより早く応急措置をしないと」

「そうだね、医療用バツクは持って来た？」

「ここにあるぜ。兄貴」

つと会話をしているのはディック、ソロ、ミケの3人だった。

「なんだ、てめえら。うちの社員じゃねえな。」つとクラウチが言った。

しかし、クラウチの話を無視し、応急措置をするディック。そして、

「よし、とりあえず応急措置は済んだ。病院に連れて行こう。」

「おい、入って来い。」の声の後に、ビーストの2人が入って来た。

「てめえら、無視すんな。」つと怒鳴るクラウチ。

「話してる暇はない。」つとソロが言う。

「ルークをどうするつもりだ。」

「どうするって、病院に連れて行くに決まってるじゃん」っとミケが言う。

「今は、ほんの応急措置をただけ。早くしないと、死ぬよ。」っとディック。

「てめえらを信用できるか。」っとクラウチ。

「早く行こうぜ兄貴。じゃないと本当に危ないぜ」

「そうだね。」っとルークを担架に乗せ、ビーストの2人が運び扉向かう。

そこへ、エミリアが扉の前に立ち塞がった。

## 2 1 行動開始（後書き）

次回は第三話・・・ではありません。

誤字、脱字がありましたら教えてください。

## 2 2大切な人(前書き)

2 1の続きです。内容は自信がないです。

今回はディックの秘密も少し、明らかになります。

では、どうぞ。

## 2 2 大切な人

「何の真似かな？」っとディック達が出ようとした、扉に立ち塞がるエミリアに言った。

「ルークをベッドに寝かせて」

「悪いけど、それは、無理な願いだね」っと言い、エミリアをどけ、ディック達は、ルークの部屋を出る。

しかし、エミリアは部屋を出た、ディック達の前に立つ。手にはクラリタ・ヴィサス？を持っている。

「ルークをベッドに寝かせてって、言ってるの。」っとエミリア。

「手遅れになるぞ、」っとソロが言う。

「あんた達が連れていくなら、あたし達が連れていく。」

「何でだい？」

「.....」

「君は僕達を知ってるはずだ。」

「信用してないからよ。」



「じゃ、信用しないままでいいよ。でも、病院に連れていく」っと歩き出す。

「勝手なまねはさせない。」医者呼びに行ったナギサがディック達の前に立っていた。愛用の武器、ステイルハーツ？を持っている。

「ルークを置いていけ。」クラウチ、ウルスラ、がそれぞれ武器を構える。

「……じゃ、無理でも通ろつか？」っとミケがゼロセイバーを構える。

「そうだな、仕方がないが」  
っとソロがラヴィスⅡカノンを構える。

「争ってる場合じゃないって」っとディック。

「だが、兄貴」っとソロ

「何をもめてる」っとナギサが攻撃を仕掛ける。

だが、ナギサの攻撃が防がれた。

ディックの武器によって、

「仕方がない……」

ディックの目の色が変わる（茶 赤）

「目の色が変わった」っとエミリアが言った。

変わったのは、目の色だけじゃなかった。ディックの身体の回りに怪しいオーラが纏ってる。

「俺も、こうなっては仕方なねえ。お前達との絆は諦める」っとディック。

「何……あいつの黒いオーラは……」っとエミリアが言った。

「油断するな、エミリア。!!」っとクラウチが言う。

「油断も何も、お前達は俺には勝てないぞ」っとディックが笑いながら言う。

「私達をなめない方がいい」っとナギサがスティールハーツ？を構え直す。

「それは面白い、相手になつてやる（君たちとは、戦いたくなかった。でも、ディオ君を助ける方が先だから……ディオ君すまない）」っとディックがディオス・デスペルタルを構える。

そして、

「なにを……争つ……てる」っと声がした。その方向へみんなが向く。

「おい、よせ」

「じっとしてろ」っとのビーストの二人が言う。

だが、ルーク（ディオ）は  
担架から降りる……いや、落ちる。

「ルーク！」「エミリアがルークに近寄る。

「エミ……リア」っと力無く言う。

「ルーク……動くな」ナギサも近寄る。

「大……丈夫……だ」

「どう見たって、大丈夫に見えないよ」っとエミリアが言う。

ルークがよろよろになりながらエミリア肩を借りて立つ。だが、立ち上がる力が無いのか、倒れるルーク。

「ルーク！！」っとエミリアが近寄る。

「ゴホッ、ゴホッ！！」っと口から血を吐くルーク。そして、また、エミリアの肩を借り、立ち上がる。

「ルーク、無茶しないで！！」

「大……丈夫だ……、それ……より」ルークがヒヤッカリヨウランをディックに構える。

「その傷でよく立てるな」っとディックが言う。

「それ……が……転……生の……力……か？」  
っとフラフラになりながらに立っているルークが力無く言う。

「そつだ、闇の転生つて言つて、闇を力にする転生……普通の人間では、制御が出来ない。お前なら制御出来るかどうかだが……」

「興……味……ない。」つとルークが答える。

「まっ、どうでもいいけど、まずは、お前の傷を手当てしなければつとディック。」

「お……前ら……の転……生……つて……言葉……も変わ……るん……だな。」つとルークが言う。

「二重人格つて思えばいい別に気にならねえよ」つとディックが答える。

「デイ……ルークさん、早く僕達の船に乗ってください」つとミケが言う……しかし、

「悪……い……が……」

バタツ！！

ルークが倒れる。

「ルーク！！」つとエミリアが近寄る。

「大……丈夫」つと答えるルーク。

「早くルークの兄貴を連れて行くつぜ、兄貴」　　つとソロが言う。  
しかし、

「いや、このまま帰るぞ。」　　つとディックがいい、医療用バックを  
置き、立ち去る。

「兄貴!!」「兄さん!!」「ディック様!!」「つとソロ、ミ  
ケ、ビーストの2人がディックの言葉に驚く。

「これで、ルークを治せ。」　　医療用バックを指すディック。

「いいのか？兄貴」　　つとソロが聞く。

「どうせ、コイツらは、ルークを連れて行かれるのは、いやみたい  
だしな」

「当たり前よ。コイツは・・・ルークは、あかし達の大切な家族  
でもあり、あたしのパートナーなんだから!!」「つと答えるエミリ  
ア。

「エミ・・・リア？」　　つと力無く言うルーク。

「あなたには、助けられてばかりだ。だから、今助けなければ助け  
られなくなる」　　つとナギサ。

「何・・・か、俺・・・が死・・・ぬみ・・・たい・・・  
だ・・・な。」　　つと笑いながら言うルーク。

「お前のような、バカで面倒な奴がいないと盛り上がらないしな。」

つとクラウチ笑いながら言う。

「本当ね。」つとウルスラも笑いながら言う。

「お……い……お……い……。」つとルークが言う。

そして、医療用バックを持って来ていたチエルシーが

「本当ヨ。アナタハ、最近、心配ばかりだかけてるモンネ。」  
つとチエルシーが言う。

「そ……そう……か？」

「本当よ。」つとエミリア

「まっただ」つとナギサ。

「それより、ルークをベッドに移動するぞ」つとルークの肩を貸す。

ナギサもルークの肩を貸す。

「すま……ない……、ナギ……サ……クラ……  
ウチ……。」つと肩を借りたルークだが、ルークが前に倒れかけ  
る。 つとそこへ、

「大丈夫？」つとエミリアが前からルークを支える。

「すま……ない、エミ……リア」つとルークは言って、エ  
ミリア達と自分の部屋に入り、ベッドに寝る。そして、そのまま寝

息をたてる。

「帰るぞ。」っとディックが言う。

「本当にいいのか？兄貴？」っとソロが言う。

「あいつとの絆を切るわけには、いかない……。ここは一旦帰るぞ」っとその場を離れるディックにクラウチが……

「ちょっと待て」

「なんだ？」っとディック

「てめえらは、何者だ？」っとクラウチが聞くが。

「ルークから聞け。」っと言ってその場を去るディック、ソロ、ミケ、ビーストの2人。

「待て、話はまだ……」っとナギサが何か言おうとしたが、

「分かったわ」っとエミリアが言う。

「エ、エミリア！？」っとクラウチが驚く。

「答えてくれるか、分からないけど、それに……」

「それに何だよ。」っとディックが言う。

「ルークの怪我也治した。とりあえず、あんた達を信じる」っとエミリア。

「あつそ、ま、詳しい事はルークから聞きな。もしらしたら、また、来るかもな。」っといい、ミケの肩に触る。

「頼んだ、ミケ」

「ハイハイ、任せて」っと何か咳くそして、

「くくくく!!!?」「くくく」

「消えた!!」ナギサが言う。

エミリアも最初は驚いたが、ミケの特殊能力の事を聞いたので、そんなには驚かなかった。

「ちっ、いろいろ聞きたかったが、しかねえな。」

「お父さん・・・あたし・・・ルークの看病しちゃだめ?」っとエミリアがクラウチに聞く。

「・・・何でだ?」っとクラウチが聞く。

「ルークに助けられてばかりだし、それになりより・・・あたしの大切なパートナーだから。ルークがいたから、あたしは変わった。だから、守ってあげたいの。今度はあたしがルークを守る。」っとエミリアが真剣な目で言った。

「・・・」



「お父さん」

「何言っても聞かねえだろが、お前はよ」っと右手で頭をかきながら言う、クラウチ。

「じゃ、私もルークを守るぞ。」っとナギサが言う。

「分かった、分かった」  
っとクラウチが答える。

~~~~~

「ルークが見つかった事だし、捜索の方は終了するようにと社員に伝えとく。」

「ええ、そうね。しかし、エミリア達、ルークの為に良く真剣に探したわね。」っとウルスラが言う。

「そうネ。ルークのためとはいえ、チョットネ。」っと顔が笑ってるチエルシーが言う。

「あら？チエルシーも？実はわたしもよ。」ウルスラも顔が笑ってる。。

「どついう意味だ？」っとクラウチ。

「そういう意味よ」

く????????

ここに1人の青年がいた。服はぼろぼろで、服は血だらけ、頬には傷痕がある。しかし、服の血は自分の血ではない。その青年の正体……ルーティンだった。

「……」

「（あんな、武器で俺に傷を負わすなんて……ディオ……。まあ、ディオを殺すのは失敗だが、もう1つの目的は達成した。……しかし、今回は疲れた。少し休んだら探るか。素材となる……人間を）」と休む場所を探すために、ホテルを探すルーティンだったが、

「おっと」つとふらつくルーティン。

「（ここまで、俺を追い込むとは、ディオのやつ、あの力をどこで……やはり、あいつの……）」つと考えながら、姿を消した。

## 2 2 大切な人（後書き）

第三話はまだ先です。

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

っていうか、今年はおわりか、今度の投稿は、来年ですね。

ソロ「っとか言って、投稿をサボるなよ」

うん、大丈夫

ミケ「サボる前に、見る人いないんじゃない？」

えっ？そ、そんなことない。っと思う。

ディック「来年もよろしく。」

## 2 3ルーティン・インガム&amp;mp・ルークの怪我(前書き)

明けましておめでとございます。これからも頑張って、書きますよ。今年も頑張って、良い小説を……

「エミリア」ではございませぬ。

## 2 3 ルーティン・インガム & ルークの怪我

ルーティン・インガム

種族：????? (見た目はヒューマン)

年齢：21歳

タイプ：アサシン (ブラック惑星のタイプ)

髪色：銀髪

一人称：俺

服装：闇のフード (ブラック惑星の服)

謎の5人の1人。ブラック惑星でも一位、二位ぐらいの強者。いくつかの惑星の強者を倒し、惑星を滅ぼしてきた。だが、ブラック惑星では、それを英雄扱いを受けている。グラールで戦ったルークに初めて傷をつけられるがルークには勝つ。ルークを止めを刺そうとしたが、ルークの反撃をくらい、失敗に終わり、やむを得ずその場から離れる。今は、単独行動をしている。何をたくらんでるかは、ルーティンの仲間でも不明。

〳五ヶ月前

(欠片事件から一ヶ月後)

〳惑星ゼロ〳

ここに2人の青年がいた。1人の青年は武器を持っている。もう1人の青年は地面に倒れている。

ズバツ、ブスツ、バサツ、

ドツカ〜ン、

「ふん、この惑星の1位、2位程の実力者って言うから、張り合いがあると思ったが・・・雑魚だな」っと持っていた武器をしまう。

「しかも、研究も使えないゴミばかり・・・。やはり、俺達の惑星の研究が一番だ。」っという青年。

っとそこに・・・

ピピピピピピ

無線に出る青年。

『ルーティン、どうだ』

「実力者って名乗る連中を倒した。片手だけでも、倒せるゴミだったけどな」

『そうか、よくやった』

「後は、ゴミ共の掃除は頼む。」

『分かった、今から出発する。』

「じゃ、俺は帰させてもらっつ

『今、迎えをよこす』

「いや、いい。」

『瞬間移動でか？』

「ああ、俺のは、距離関係なく使えるからな」

つとルーティンが瞬間移動を使い消えた。

〈惑星・ブラック 大都市〉

「てめえ、金出せ！！」

「ゆ、許して下さい」

「お前が俺にぶつかったから、怪我したんだよ、だから金出せよ！  
！」つと不良は武器を向ける。

「は、はい。すみません」っと青年は金を出す。

「全部出せ!!」

「っともつと金を出すよに言っつ。」

「もう、ありません」

その光景を見ていたルーティン。だが、無視をし、先に進む。

「（弱いからいけないんだ。ここでは強いものが勝つ。）」っと自分の家に着いたらルーティンは自分の家に入ってしまった。

一ヶ月前

（欠片事件から五ヶ月後）

「ルーティンの家」

仕事で自分の家に帰ってきたルーティン。ソファアールによこになる。っとそこに……。

「ピピピピピピピ」

「（くるせえなあ）」



ピッ、

通信には出ずに、通信を切る。

ピッピッピッピッ

「(はあ〜)」

ピッ

『おい、ルーティン!!何で通信を切るんだよ!!!』

「うるせえからだよ。今帰ったばかりだからだよ。」

『だからと言って切るな!!!』

「っで、何だよ。」

『今度のお前の行く惑星が見つかったぞ。』

「またかよ、他のやつらに、行かせるよ」

『いや、お前に行かせると、「あの人」からの命令だ』

「『あの人』から?なぜだ?」

『さあな、後、ついに、お前が言っていたやつができたみたいだぞ』

「そうか。じゃ、その惑星で試すか。」

『そつしてくれ』

「っでその惑星は？」

『べつやらっつあるらしい』

「ここから近くにあるのか？」

『ここから離れているが、その3つの惑星は、1つ、1つわりと近くにあるらしい』

「でも、3つとなると面倒だな」

『どうやるかは、あんたの知恵次第だ』

「分かった。つま、実験には、ちよつどいい」

『じゃ、頼んだぞ。場所はここだ。』

「分かった」

場所を聞いたルーティンは、通信を切る。

「その惑星は、張り合いのある奴はいるのか。つま、いなくても、実験にはちよつどいいのは、確かかもな」つと家を出て、瞬間移動を使う。

「惑星パルム」

「（何だ？この惑星の連中は？変わったやつが多いな。」

「（耳が尖ったやつに、耳が変わった形のやつ。機械のやつに、肌が白いやつ。何だ？こいつらは）」  
ピピピピピピピ

ピッ

『ルーティン、どうだ？この人間共は？』

「変わった連中が多い。俺達とは違う。なんて言えばいいんだ？変わり者が多いな。」

『それじゃわかんねえよ』

「そうか、じゃ写真を送る」

『……、確かに変わった連中だな』

「惑星も多い、排除するには時間が掛かりすぎる」

『……』

「情報を集める。この3つ惑星を調べる。分かったら連絡する」

『分かった』

ピッ、

（パルム・大都市 図書館）

「（なるほど……この惑星には、五種族の種族があるのか。）  
「ルーティンが本を読んでいる。」

「（ヒューマン、俺と同じだな。」

ペラ、

「（ん？これは……）」  
「（なるほど、五百年戦争……四種族が戦争か。今度は五種族の戦争……これは使えるな）」

ピッ、

「ルーティンだ。どうだ？」

『あなたの相変わらずの少ない情報通りに造ってるが（情報伝達済み）、時間がかかるな。初めての事だからな。だが、安心しろ。完成させるからよ』

「頼んだ。」

『ん？ちよつと待った』

「どうした？」

『どうやら、完成したらしい』

「（時間が掛かるっていったのに……、どついつ頭脳を持つてるんだ？うちの惑星の研究者共は。）」

『今、そつちに行くように言っておく』

「分かった。」

「（奴らの滅ぼすには、そいつらの力が必要だからな）」と本を元にあつた場所にしまう。

そして本を戻した場所に置いた時、不意に隣の本に目がいく。

「（ん？）」

ペラッ、

「……、」

真剣に読む

「……、」

真剣に読む

「……………!!」

内容に驚く。

「ふっ、」

っと小さく笑い、その本を戻した。

「（もう、勝ったもんだ……この惑星も対したことない）  
っと図書館を出るルーティン。」

「いや、この惑星は、他の惑星とは違う。」

「倒さなければならぬ、奴らが多いから、少しは楽しめそうだ……」  
「……」  
っと図書館を出たルーティン。そして、人の目が行かない所で姿を消した。

↳ルーティンが姿を消した数日後↳

「早く、早く、早く、早く。」

「遅いと置いていくぞ。」

「あのな、俺たくさん荷物を持ってるんだぞ……」  
「つと  
言いながら2人の女性に付いていくルーク。

「あつ、あつちの店も行くよナギサ。」

「そつだな。」

「エミリア、ナギサ、いい加減帰らないか？」  
「つと言ったが無視をし、店に入っていくエミリアとナギサ。

「はあ〜」  
「ため息をついたルークがエミリア達の後に続く……  
が、

「きゃ〜〜、

「うわあ〜、

「助けて〜、

「……!」  
「つと悲鳴がした方向に振り向くルーク。

「な、何？今の悲鳴」  
「つと焦るエミリア。

「隣の店から、聞こえたぞ」

「つと隣の店に指を指すナギサ。

「つとその時

「……ル、ルーク……」っとエミリアが叫んだ。

ルークが悲鳴の聞こえた店に向かって入っていった。

「ま、待て、ルーク」その後を追うナギサ。

「ちょっと、ちょっとナギサ!?」っとエミリアも後を追う。

~~~~~

「金を持ってこい。今すぐ持ってこないと、1人ずつ殺すぞ」

バキューン、天井に銃弾を撃つ。

きゅん

「（強盗か……）」物陰で犯人の様子を見る。

「（強盗は……一人か……よくまあ一人でやるな）」

「（ルーク。）」っとルークの後ろから、ルークを呼ぶ声がした。

「（うわ、ナ、ナギサか）」「（何が起きたの?）」「（エミリアも来ていた。）」



「強盗だ。犯人は見える限り一人だな。」  
「つとまったその時、  
バタバタバタ、

「「「!?!?」」」

「ガーディアンズだ。武器を捨てて投降しろ。」

「「おいおい、人質がいるんだぞ」」

「ガ、ガーディアンズが怖くて強盗なんかできるか」  
「つと強盗犯は銃弾を一般人に向ける。」

そして、

バキューン

きや~~~~

銃声がした……。しかし、当たったのは、

「うわあ~~~~」  
強盗犯は持っていた、ハンドガンを離す。どうやら、強盗犯のハンドガンにあたり、驚いて離れたみたいだ。だから、怪我はしていない。

「リトルウィングのルークだ!! 大人しく投降すれば、怪我をしないですむぞ。投降しないと……」  
つとハンドガンを構えながら言うルーク。

「(エミリア？私達も行った方がいいのでは?)」

「(ルークが言ったでしょ。ここにいろって)」

「それは失敗だったな。」

「「!!」」つともう一人の強盗犯が持っていたセイバーでエミリア達を攻撃をする。

しかし、

バキューン、

「ぐわ〜」

「こうなるぞ。」つとルークが後ろ向きで銃弾を撃った。いや、前方あった鏡を見ながら撃った。

「は、はい……って、なんてね」

バキューン

「!!」

「ルーク!!」

「ざま〜みる。」

バキューン

「ぎゃ〜」

「そんなんで俺を倒せると思ったか？」　つとルークが言った。

「捕まえる！！」　つとガーディアンズ達が強盗犯達を捕まえる。

「ルーク！！大丈夫？」

「大丈夫か？ルーク」

つとエミリアとナギサが心配する。

「大丈夫だよ。ただのかすり傷だ」

「でも、血でてるよ」

「ルークさん」　つと後ろから声がした。

「ルウ？なぜここに？」

「強盗犯を捕まえに来たんです。それよりルークさん。早く我々の船に乗ってください。」

「なんで？」

「怪我をしたのは、我々ガーディアンズ theres 責任があります」

「べ、別にあんた達の責任だといってないぞ」

つとるが言う。

「しかし、あなた怪我人です。怪我人の方々は我々の船で病院まで連れて行きます。」

「だったら、他の怪我人を病院まで連れて行ってくれ。俺は病院にいくほどの・・・おっと、「つとふらつくルーク

「ルーク？大丈夫？」

「ああ、何か、めまいがするな。」

「めまい？」

「ルークさん、強盗犯のハンドガン調べましたら、あのハンドガンには、毒が付いていました。」

「毒だと」

「はい、ですので、検査をかねて我々の船で病院まで来てくれますか？」

「はあく分かったよ」渋々ながら頷くルーク。

「あ、あたしも」つとエミリアが行ったが・・・

「お前達は先に帰れ。荷物があるんだから。」

「でも、」

「何かあったら連絡するから。」

「じゃあ、行きましょう」

「ああ、」っとルウの後に付いていくルーク。

ルークがガーディアンズの船に乗るのを確認すると、

「……帰ろうか？」

「買い物続きはしなくていいのか？」

「もういいよ、それどころじゃなくなったし、」っとエミリアが手を上げ、タクシー（このタクシーは空飛ぶ車です。乗客を探す時、乗せた時は低空飛行で移動します）を止め乗る。

「ほら、ナギサ早く」

「ああ、すまない」っとナギサもタクシーに乗る。  
そして、エミリア達の乗せたタクシーはエミリア達が止めた船まで向かって行った。

〈病院〉

「とりあえず、解毒剤で毒の方は除去しました。」

「ありがとうございます」

「ですが、弾丸が身体に入っているので、取り除く手術をしたいんですが……」

「このままでいいよ」

「いけません。今は、何もありませんが、何が合った時には遅いですよ」

「じゃここで、取ってくれ」

「はい？」

「麻酔などしなくていい、今すぐ」

「む、無理ですよ。」

「じゃ手術室で、やってくれ、今すぐ」

「わ、分かりましたよ。じゃこれに寝て下さい」

「担架？怪我人じゃあるまいし」

「立派な怪我人ですよ」

二時間後

「弾は取りましたよ」

「ありがとうございます」

「定期的に病院に来て下さい。」

「分かった、分かった」

「身体に異常がありましたら、すぐに病院に」

「分かりましたよ、では、失礼します」

「お大事に。」

↳パルム・病院駐車場前↳

「ルーク」つとエミリアが手を振った。

「悪いな、エミリア。迎えに来てもらって」

「ううん、気にしないで。・・・怪我は大丈夫？」

「ああ、解毒剤も飲んだし、薬ももらった。何か合ったら、病院に  
来いだって」

「よかった〜、」つと安堵をするエミリア。

「じゃ送ってくれる？」

「うん、分かった」

ルークとエミリアは、船に乗り、リトルウィングに向かった。



## 2 3 ルーティン・インガム & amp・ルークの怪我（後書き）

ルーティンの事と、ルークの身体の怪我に付いて編でした。次は第三話にするか、2 4にするか迷ってます。

誤字、脱字がありましたら教えて下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4736z/>

---

ファンタシースターポータブル2i～異世界の5人～

2012年1月2日03時47分発行